

吉井源太と明治

《2》

組合設立に奔走

吉井源太による明治二十五年（一八九二）年の日記にこのような記述がある。

△日本紙が洋紙に圧倒されるを今此假指置ては、矢張紙工商は開化国の下界に降る外なし

この意味は、和紙が洋紙に圧倒されるままにしておいては、和紙製造業者や紙商人は、西欧の国々の下位になっているばかりだという警告だ。洋紙製造業による日本製の紙への圧迫を感じ、どうにかしなくてはならないという思いがあったことがわかる。

ちなみに、明治時代より前には「和紙」という言葉はなく、「美濃紙」など個々の名前で呼ばれるか、ただ「紙」とよばれていた。明治時代になると、新しく入ってきた洋紙に対して、

日本で作られていた紙のことは「日本紙」とよばれた。源太の日記にも「和紙」という言葉はほとんど出てこない。「和紙」という言葉は、西欧の製紙技術や知識を学んだ人たちが使

いた。源太は、国内の紙製造業の先行きが不安なものになっていく中、紙製造業者は協力しなくてはならないという考えを持っていた。みんな協力することがこの状況を乗り切り、発展をもたらすために必要だと考えていた。一つの例として、

明治二十年ごろ、紙業組合を設立の動きに加わっている。この時は、政治や和紙業界の中に混乱があったので、活動は順調ではなかった。多くの紙製造業者たち

からは組合への賛成が得られなかった。自分の利益にならないからと、明らかに反対する人も多かった。それでも源太は、紙製造業者

からは組合への賛成が得られなかった。自分の利益にならないからと、明らかに反対する人も多かった。それでも源太は、紙製造業者

からは組合への賛成が得られなかった。自分の利益にならないからと、明らかに反対する人も多かった。それでも源太は、紙製造業者

からは組合への賛成が得られなかった。自分の利益にならないからと、明らかに反対する人も多かった。それでも源太は、紙製造業者



明治20年、安芸方面へ巡回した源太。野良時計は明治のシンボル（安芸市土居）

まわったのである。明治二十一年（一八八七）年の十一月には次のような出張ルートで仕事をこなした。日付と場所を並べ立ててあり、読みづらくて申し訳ないが、場所の移動の様子だけイメージしていただければと思う。

まず十一月九日に伊野から高知市へ向かい、翌日は赤岡入り。その後、安芸町、井の口を回り、十四日は再び安芸町を経て奈半利へ。十六日からは連日、井の口、赤野、赤岡、西川の山川村、また赤岡、赤野そして再び奈半利と回る。二十三日からはまた安芸に滞在し、結局、高知市に戻ったのが十二月に入っていた。一カ月近くにわたる休みなしの仕事だったことがわかる。このような活動には、相当な体力が必要だっただろう。源太は、比較的体力に恵まれた人だったようだが、無理をしすぎた時、たまに喘息の発作を起こすことがあった。それでも多忙な活動を支えたのは、正しいことを正しいと思う、信念の強さがあったように考えたい。その根底には、紙業仲間の存続や発展を願うという心、情があった。源太には「体力」、「信念の強さ」、「情」があった。これは、どのような仕事の時にもそうであったと思える。これらの面が源太の中にそろってあったからこそ、後世に残るような仕事ができただと思うのだ。

（京大大学院研修員、京都府在住）